政治地理学と唯物論
—政治理論と空間理論の接合に向けて—

中島 弘二

はじめに

1993 年 5 月の経済地理学会大会において「空間と社会」と題するシンポジウムが開催された。地理学のみならず経済学や社会学，政治学，歴史学といった隣接諸科学をも含めて，空間論を理論的契機として現代社会理論・経済理論を再構成しようとする意欲的な試みであった。このシンポジウム報告において高木彰彦氏は政治経済学におけるマルクス主義ルネッサンスが近年の政治地理学に与えた影響の大きさを指摘し，一方，政治学者の加藤哲郎氏はボーダーレスな経済空間とボーダーフルな政治空間との重層的な編成構造の解明を指摘し，ともに政治理論と空間理論の相互的展開の必要性を示唆された。しかしわたしは，そのような政治学と地理学との相互交流が必ずしも理論相互の内在的深化にはつながらず，どこかすれ違いを残したままに表面的に進められているという印象を拭えなかった[1]。

そうした印象は歴史学や経済学と地理学関連分野との関係についても感じられたが，とりわけ政治学と（政治）地理学との相互交流に関して「空間と社会」という共通論題にかかわる主題的議論が希薄であると思われた[2]。単に政治現象の空間的形態を明らかにしたり，政治理論に「空間」というタームをアナロジカルに導入するだけでは，両者のすれ違いは解消されないのではないか。幾何学的次元における「空間」論の導入だけでは政治現象の本質的性格は解明されないのではないか。シンポジウムの成功とは裏腹に，わたしはそうした疑問をおさえることができなかった。

欧米の地理学界においては近年の社会理論への関心の高まりとともに，政治地理学もますます「政治-経済学」的アプローチを援用するようになってきた。しかしそうした傾向はドライバーが指摘するように，地理学的伝統を非空間的語彙によって置き換えるだけに終わってしまうという方法論的困難性を抱えている（Driver, 1991）。地理的現象への政治-経済学の枠組の素朴な「あてはめ」は，逆に政治と空間性との本質的なかかわりを覆い隠してしまう危険性をはらんでいるのである。

また一方で，マッシィが指摘するように，空間性という概念自体が近年の社会・政治理論家によって様々に読解されている状況がある（Massey, 1992）。例えばラクラウはその著書『現代革命に関する新たな省察』（Laclau, 1990）において時間と空間の概念をアナロジカルに援用してポストマルクス主義の時代における新たな革命の可能性を模索している。彼は構造の転換 dislocation と歴史の生成を含意する「時間性」の概念とを対比させて，静態的で決定論的な枠組を含意する概念として「空間性」を用いている（Laclau, 1990, pp. 68-69）。そこでは空間性は社会の構造的制約を体現したものとして均質化と意味の固定化を主体に迫るものとされ，空間性をめぐる政治的実践や自由の可能性は閉ざされてしまっている。マッシィはこのような静態的「次元」として空間性をとらえる Laclau の理解—そこでは社会が時間に応じて運動する二次元，三次元の断面とみなされる—をきびしく批判し，かわりにより動態的で時間と相互作用し，それゆえ政治的実践に開かれたものとして空間性をとらえるオルタナティブな視点を再構成しようと試みている（Massey, 1992）。

わたしはこのようなマッシィの試みや上述のドライバーの問題設定に共感を覚えるものである。前述のシンポジウムの例にも見られるように，近年の社会諸科学における空間論の隆盛とは裏腹に空間性の概念に対する諸学問間での理論的検討はいまだ不十分なものにとどまっていると言わざるを得ない。そこでは「空間」概念のアナロジカルな「あてはめ」や素朴な反映論にとどまらない，より本質的な議論が必要とされていると思われる。

本稿は唯物論を共通の理論的基盤として政治地理学

と政治理論における空間性の概念を検討し，社会・政治理論における空間性概念の理論的・実践的意義を明らかにすることを目的とする。日本のみならず欧米の議論も含めて政治地理学は社会地理学や経済地理学と比べてみてもこの種の試みが最も不足している分野だと考えられるからである。以下では最初に，世界システム論に基づき政治地理学の方法論的統一をなしとげた（高木，1991）とされるP. J. テイラーの政治地理学的パースペクティブ，とりわけ「政治地理学の唯物論的枠組」と位置づけられる「地理的スケールの政治学」についての検討をおこなう。テイラーは近年における主導的政治地理学者の一人と目される人物だが，「地理的スケール」にあらわされた彼の空間性概念と唯物論理解の関係については十分な検討がなされていない。次いで政治学者プーランザスの空間性概念と政治理論との関係について検討をおこなう。彼の空間性概念については従来ほとんど言及されることはなかったが，空間性は晩年の彼の仕事の理論的中核をなす概念であると考えられる。本稿ではプーランザスの政治理論における空間性と政治（ポリティクス）との理論的関係の検討を通じて空間性概念に根ざした唯物論的枠組の可能性を模索することを試みる。

以上のように，本稿はテイラーの政治地理学的パースペクティブとプーランザスの政治理論を手がかりとして，唯物論的基盤のうえに（政治）地理学と政治（経済）学との接点を探ろうとするものである。そうした試みは地理学と政治学との双方にコミットするという点で二つの唯物論的プロブレマティクを同時に含んでいる。それは地理学的パースペクティブとしての「空間論」を史的唯物論の枠組のもとで再構成することであり，同時に，政治経済学を地理的唯物論のもとへと再定位することである。

なお，本稿は政治地理学全体の展望やテイラーの政治地理学の全体像を描き出すことを目的とする展望論文ではない[3]。本稿の目的は上記二点の主題に関する方法論的・認識論的検討を行なうことである。それゆえ本稿でとりあげる論考は上記の主題に直接および間接的に関連するものに限るものとする。

政治地理学の唯物論的枠組—P. J. テイラーの「地理的スケールの政治学」—

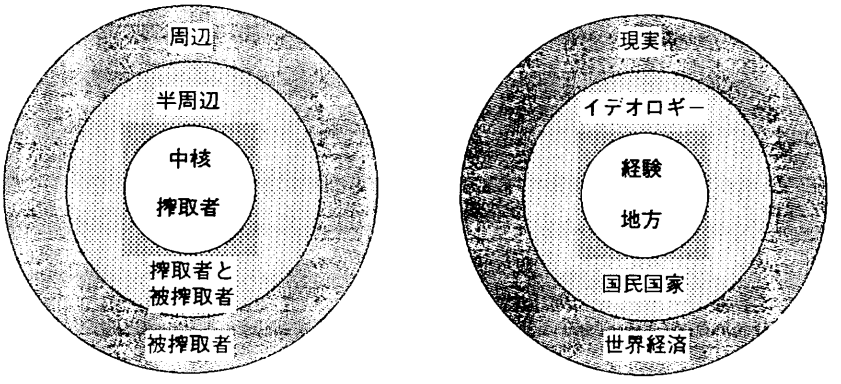
テイラーの政治地理学の枠組は彼の主著の一つである『世界システムの政治地理—世界経済，国民国家，地方—』(Taylor, 1985a, 邦訳はテイラー, 1991, 1992) に体系的に示されている。同書の最新版（1993年）においてテイラーは近年の国際政治のドラスティックな変化に言及しながらもテクストの基本的な理論構成を変える必要はないことを確認し，「地理的スケールの政治学は依然として私の政治地理学の核心に位置し続けている」（Taylor, 1993, p.ix）と明言している。それゆえ本章ではこの「地理的スケールの政治学」をテイラー政治地理学の中心的主題として検討の対象とする。

「地理的スケールの政治学」という概念は最初1981年に雑誌 Review において報告された（Taylor, 1981a）。この論文においてテイラーは世界経済を構成する三つの次元（現実，イデオロギー，経験）に対応した地理的スケールの三つの次元（世界経済，国民国家，都市）を提示した。同年に彼は地理学も含めて多くの社会諸科学が前提とする対象の地域性という問題（地域的に定義されたものを研究対象とする前提）について議論し，そうした問題に対する解答を世界システム論に求めた。諸対象を最終的に定義するものは国家の領域や個々の都市・村落ではなく世界経済という一つのシステムに他ならないと主張するテイラーは，ウォーラーステインの世界システム論を政治地理学へ適用することを提唱したのである（Taylor, 1981b）。

こうした「地理的スケール」の概念と世界システム論アプローチは翌年のTransactions of the Institute of British Geographer 誌に掲載された「政治地理学の唯物論的枠組」と題された論文（Taylor, 1982）において理論的に体系化された。わたしはこの論文をテイラーの仕事の中ではきわめて重要なものと考える。なぜなら同論文の内容は後の『世界システムの政治地理』の理論的中核を構成しているのみならず，彼の政治地理学と唯物論的視点とのかかわりについて主題的に論じた数少ない論文だからである。それゆえわたしは同論文を検討することから「地理的スケールの政治学」に関する議論を始めたい。

1. 国家とイデオロギー—「虚偽意識」論を越えて—

テイラーは政治地理学のための唯物論的立場として，①政治と経済との基本的な一体性への認識，②国家の相対的自律性の承認，③国家分析の基礎に世界経済における資本蓄積の政治経済学を据えること，以上の三



(a)地域による水平的区分　　(b)スケールによる垂直的区分

図1　分離と支配の三層構造（Taylor,1982,p.25および1993,p.44より作成）

点を提示している（Taylor, 1982, p.20）。一見すると相反するかのような①と②の立場は，彼によれば③の世界経済のレベルにおいて初めて統合されるのである。ネオ・マルクス主義国家論における国家の相対的自律性概念に対して，テイラーはドイツの「国家導出論」学派（Holloway and Picciotto, 1978）に依拠しつつ，国家の相対的自律性を過度に強調することは政治と経済との相対的分離を固定化してしまう危険性を孕んでおり，そのことは政治の「国家」への矮小化とそれゆえグローバルな資本蓄積過程の「政治的」側面の軽視につながると批判している（Taylor, 1982, p.19）。テイラーにとっての国家の相対的自律性とは，総体的な資本蓄積過程における資本家階級に固有の不統一とその権力ブロックの多様性に由来するものとして，世界経済の分析枠組の中に位置づけられるのである。

このように国家を世界経済論的パースペクティブのうちに再定位しようとするテイラーの試みは，そうした「国家の唯物理論」の編成原理として「地理的スケール」を要請するのである。上述のようにこの「地理的スケール」は，「世界経済」「国民国家」「都市（地方）」という三つの次元によって構成されている。こうした地理的スケールの種別性は社会科学の各分野によって一般的に使い分けられてきたが[4]，テイラーはそうした区分自体が世界経済の現実的構成に由来しており，それゆえ三つのスケールの統一的把握は，ローカルな都市社会の研究からグローバルな国際貿易の研究まで，様々なスケールの社会諸科学を世界システム論の全体的なコンテクストのうちに定位することを可能とすると指摘している（Taylor, 1981a）。

しかし次節で述べるように，テイラーはこれら地理的スケールの三つの次元をいわゆる空間プロセスを強調する特定の地理学的枠組として用いているのではなく，あくまで世界経済の現実的構成に対する政治経済学的分析から引き出している。そのような世界経済の現実的構成が，三つの各スケールに対応する「現実」「イデオロギー」「経験」の各レベルである（図1）。テイラーはこれらの各レベルと地理的スケールとの対応関係についての分析を国民国家とイデオロギーの関係への言及から始めている（Taylor, 1982, p.24）。彼によれば国民国家のスケールは，都市生活における人々の日常的経験を世界的規模での資本蓄積という現実から切り離すイデオロギーの役割を果たしていると考えられる。例えば国家主義や民族主義のイデオロギーの効果は，様々な政治的抵抗を国民国家というイデオロギーのスケールにおいて確実にストップさせることで，世界経済のスケールにおける資本蓄積過程からそれらの抵抗をそらすものとして理解されるのである。このようにテイラーにおいてはイデオロギーが「現実を誤った，限られた図式へとねじ曲げる偏ったシステムの見方」（Taylor, 1993, p.45，邦訳上巻52頁）として，すなわちマルクス主義的意味での「虚偽意識」（Taylor, 1982, p.26）として理解されている。そして国民国家とは何よりもこうした「虚偽意識」を体現した地理的スケールとして位置づけられているのである。

一方でテイラーは都市の建造環境の諸効果についても言及している。ハーヴェイの建造環境論（Harvey, 1977, 1978）に依拠して，テイラーは固定資本投下を通じた建造環境の創出を世界的規模における資本蓄積から生じた過剰蓄積のはけ口とみなし，そうした資本蓄積過程が都市的経験のスケールを定義すると主張している（Taylor, 1982, p.30）。資本の第二次循環における建造環境の創造をグローバル・スケールにおける世界経済とローカル・スケールにおける都市的経験とを結びつけるチャンネルと位置づけながらも，彼はそうした過程における国家の役割には注意を向けようとしない。ハーヴェイが指摘するように第二次循環への資本のフローの一般的諸条件の一つは，建造環境の創出に関わる長期的かつ大規模なプロジェクトに融資し，それを保証しようとする国家の存在である（Harvey, 1985）。建造環境の創造を通じた資本蓄積過程において資本主義国家が果たす役割は単なる「虚偽意識」に限らない。資本主義国家は都市の物質的環境を構成する現実的諸力としても機能すると考えられる。テイラーにおいてはこのような物質的環境を構成する現実的諸力としての資本主義国家と「虚偽意識」を体現した地理的スケールとしての国民国家との理論的関連が触れられていない。

もちろんテイラーは資本蓄積過程における能動的なエージェントとしての資本主義国家の重要性には気づいており，例えば集合的消費の供給における近代国家の役割に言及している。カステルの仕事（カステル, 1984, 1989）によりながら，テイラーは労働力再生産のための様々なサービスの供給によって近代国家を特徴づけている。彼によれば集合的消費の供給過程は「地方国家 local state」によって媒介されることで，中央政府から地方への集合的消費の供給の減少に対する地域住民の非難をそらすことを可能としているとみなされるのである（Taylor, 1982, pp.30-31）[5]。しかしながらこのような説明においては，世界経済における「国民国家」のイデオロギーが国民経済における「地方国家」のそれに置き換えられたに過ぎず，集合的消費の供給がどのように都市の物質的環境を構成し，それに資本主義国家がどのようにかかわっていったのかという問題が依然として検討されないままに終わってしまっている。この点は集合的消費をめぐる様々な抵抗がまさに都市の物質的環境をめぐる闘争として展開されている（カステル, 1989）ことからも致命的である。

以上のことから，テイラーの議論には二つの理論的問題が残されていると思われる。第一は集合的消費の供給と建造環境の創出との関係である。ハーヴェイが述べるように建造環境は固定資本と消費元本の二つから構成され，前者は生産の素材を，後者は集合的消費のための素材をそれぞれ含むものと考えられる（Harvey, 1985）。それらは資本蓄積と社会的再生産のための物質的装置として機能し，またそれによって資本制生産様式に種別的な都市の物質的環境を構成する。しかしながらテイラーはこれら二つの要素を切り離して取り扱い，前者は主に資本蓄積の問題として，後者は主に階級闘争の問題として論じてしまう。そのうえでそれらはグローバル・スケールにおける資本蓄積という現実がローカル・スケールに表出された異なる二局面とみなされてしまうのである。結果として都市の物質的環境を構成する現実的諸力としての資本主義国家の役割は検討されないままに終わってしまう。

第二はイデオロギーの「物質性」という問題である。テイラーは国家のイデオロギー的役割について言及する際にアルチュセールのイデオロギー論を援用しながらも（Taylor, 1982, p.24），アルチュセールによって示唆されたイデオロギーの重要な局面を把握し損なっている。アルチュセールは生産諸関係の再生産を保証する国家のイデオロギー的役割に言及しながらも，決してイデオロギーを単に理念的なものとはとらえない。イデオロギーの「第二テーゼ」において，アルチュセールはイデオロギーが物質的存在を有していると主張する（Althusser, 1970, p.26）。彼によればイデオロギーは単に理念的に存在するのみならず，学校や教会，裁判所，市庁舎，住宅などの物質的装置と，そこにおける授業やミサ，会合そして生活という実践の中に存在すると考えられるのである。こうしたアルチュセールの考え方に従えば，国民国家のイデオロギーとは単に「虚偽意識」として存在するものではなく，具体的な国家装置とそれをめぐる人々の物質的諸実践の中に存在するものと考えられる。それは言い換えれば上で述べたような都市の建造環境とそれをめぐる人々の日常生活の中にこそ国民国家のイデオロギー的基盤が存在するのであり，国家のイデオロギー的役割の解明のためにはその具体的様態の検討が不可欠であることを示していると考えられる。

2. 地理的スケール—空間物神論と空間の道具主義的

理解—

以上のような方法論的諸問題のために，テイラーの唱える「地理的スケールの政治学」は地理的スケールの物質性を十分に把握できずに，地理的スケールを世界的規模での資本蓄積の諸過程が反映される単なる空間的「次元」として取り扱ってしまっている。それゆえテイラー政治地理学の方法論的諸問題の検討は，同時に，「地理的スケール」に含意されている「空間性」の問題に関する認識論的検討を必要としていると考えられる。

テイラーは「中心—半周辺—周辺」というウォーラーステインが唱える世界経済の「絶対的空間構造」に対して，彼が唱える地理的スケールの三層構造を「相対的空間構造」と呼んでいる[6]。テイラーは彼の唱える空間構造が空間諸過程を強調する特定の地理的枠組ではなく，単に一つの批判的な視点—唯物論的枠組における批判的な空間的視点—に過ぎないことを強調している（Taylor, 1982, pp.21-23）。空間構造に対するこのような彼の主張は，地理学における空間的属性に対する過度の強調が空間物神論に陥ってしまった事に対する反省と批判の上に展開されている。空間的ディシィプリンとして自立した地理学を生みだそうとする試みが，逆に「空間」を物神化し，真の諸過程を覆い隠してしまったことを，テイラーは厳しく批判している。それゆえ彼の政治地理学においては空間的視点は単に唯物論的諸概念を組織する一つの方法に過ぎないとされるのである。

テイラーは自身の思想的立場を，現今の国家体制によって押しつけられた既存の空間秩序を受け入れる「現状維持」派や福祉国家の枠内での資源配分の問題に腐心する「改良」派と区別して，既存の国家的・社会的秩序を拒否し，マルクスの理論と実践によってそれを置き換えようとする「ラディカルズ」であると同定している（Taylor, 1983）。そして地理学的視点の価値は，資本主義社会の社会主義社会への転換と野蛮（ファシズム）への後退の阻止に対する斯学の貢献によって決定されると断言する（Taylor, 1985b）。このいささか古色蒼然とした規定は，しかし彼の地理学観に大きな影響を与えている。上述のようにテイラーにとって地理学とは固有の対象を持った独立したディシィプリンではなく，ラディカルな政治経済学の中での一つの視点であり，また革命という課題のための知的道具と理解されている。地理的視点に対するこのようなテイラーの定義は，前述のように「空間物神論」を回避し，また近代諸科学の有するブルジョア的発展主義を克服しようとするものであったが（Taylor, 1989a），それは一方で諸刃の剣の危険性を有していると考えられる。決定因としての世界経済における資本蓄積の諸力に対する過度の強調は，前述のように各々の場所における建造環境の構築の問題をグローバルな蓄積過程の単なる空間的反映へと還元してしまい，個々の現場における建造環境をめぐる物質的諸実践がはらむ諸問題を見えにくくしてしまう危険性をはらんでいる。もちろんテイラー自身，繰り返し言及しているように（Taylor, 1981b, 1982, 1989b），それは彼の政治地理学がローカルな諸力を軽視していることを意味するものではない。むしろテイラーは地域地理学 regional geography の活性化を提唱しさえしているのである（Taylor, 1989a）。それゆえここで検討されるべき問題は，グローバルかローカルかという問題ではなく，空間性の概念がいかに理解されるべきかという問題であると考えられる[7]。

テイラーの政治地理学的視点においては空間性の問題はスケールの問題に還元されてしまっており，世界経済，国民国家，地方の各スケールにおける具体的な空間形態と資本蓄積体制との理論的関係については言及されていない。そこではハーヴェイが示したような「空間の生産」を通じた蓄積構造の再生産のメカニズムという問題は世界システムの領域的構造の問題へと還元されてしまうのである。

上述のようにテイラーは地理的スケールを唯物論的枠組の中での一つの視点ととらえている。ウォーラーステイン（Wallerstein, 1979）に従って，彼は「『全体性』はいかなる研究によっても経験的に操作されることのないものであるため，われわれは全体としてのシステムに関する『諸視点』を考案しなければならない」と述べている（Taylor, 1989b, p.350）。「全体性」と「視点」に関するこのような説明に基づき，テイラーはグローバル・スケールにおける資本蓄積という「全体性」を確固とした現実とみなし，地理的「視点」を発見的に定義される戦術的な決定とみなす。空間性を分析のための戦術的な道具とみなすこのような見方をわたしは「空間の道具主義的理解 the instrumentalist view of the space」と呼びたい。

この表現は「国家の道具主義的理解 the instrumentalist view of the state」からインスパイアされたもの

であるが，それは単にアナロジカルに用いられているのではなく，二つの道具主義がある理論的な連関を持つものであることを含意している。国家論における道具主義的アプローチとは資本家階級が支配の道具として国家を利用すると考える見方であるが，こうしたアプローチは資本主義国家を資本制システムの再生産のための道具とみなす経済還元主義と深く結びついたものである（Jessop, 1982, 1990）。テイラーは素朴な経済還元主義を拒否し国家の相対的自律性概念を彼の唯物論的命題の一つとして受け入れている（Taylor, 1982）。しかし全体としての資本制システムを所与のものとし，地理的スケールをその道具とみなす限りにおいて，国家論におけるものと同じ道具主義的な諸前提を共有していると言えよう。空間を実体化しそれに過度の存在論的自律性を与える「空間物神論」を回避しようとするテイラーの試みは，一方で空間性を過小評価し唯物論的枠組に普遍的妥当性を付与することとなってしまったと考えられる。

結果として地理的スケールの理論は唯物論的枠組の中での政治経済学の空間的反映とみなされてしまう。テイラーにおいては唯物論における空間性の含意が理論的に検討されることなしに，資本蓄積に関する唯物論的諸概念が所与のものとみなされしてしまうのである。テイラーが理解する唯物論とは，「政治的諸制度と諸概念は社会の基本的な物質的必要性から切り離しては理解することができない」（Taylor, 1982, p.15）というものである。しかしここでの「物質的必要性」とは何であろうか。それは単に経済的必要性を意味しているのであろうか。地理学とは単にマルクス経済理論の空間的応用に過ぎないのであろうか。地理的視点とはマルクス経済理論の分析にとっての戦術的な道具に過ぎないのであろうか。われわれは空間物神論と経済還元主義の双方に陥ることなく，いかにして唯物論的枠組における空間性概念を再活性化しうるだろうか。こうした問題に応えるためには唯物論的枠組における空間性の概念について再検討する必要があるだろう。次章においてはプーランザスを手がかりとしてこの問題について考えてみたい。

プーランザスにおけるポリティクスと空間性

プーランザスはその最後の著書『国家・権力・社会主義』（Poulantzas, 1978，邦訳はプーランツァス[8]，1984）の第1章において「国家の制度的物質性」と題して資本主義国家と空間性・時間性との関係を主題的に検討している。しかし同訳書の訳者田中正人氏によれば，この第1章における時間論・空間論およびフーコー権力論への言及はそれ以前のプーランザスの諸説には見られなかった新たな展開（そして最後の展開）であり，それゆえ政治学においてもこの部分について主題的に論じられることはほとんどなかった。そこで以下では最初にプーランザスの国家論ならびに社会理論の特徴を概観して，次いでそれらが空間性の問題とどのようにかかわるのかをみていきたい。

1. 生産様式と社会構成体

プーランザスは既存のマルクス主義国家論における経済還元主義と国家の絶対的自律性論の双方を厳しく批判している。彼によれば経済還元主義はあらゆる生産様式を通じて「経済的なるもの」の場を不変のものとし，国家を含む上部構造の諸審級を「経済的なるもの」の単なる反映とみなす傾向にあるがゆえに，理論的にはそれに対立し経済的下部構造からは切り離された上部構造の自律性と不変性を唱える絶対的自律性論と同一の認識論的構造にあると考えられる。なぜなら認識論的に分離可能な対象とされる「経済的なるもの」の一般理論の可能性と正当性を認める認識は，経済の持つ普遍的境界の外部に国家を排除し，国家と経済を分割する不変の境界を設けることによって，逆に固有の場を有する認識論的対象としての国家に関する一般理論を認めてしまうのである（Poulantzas, 1978, pp.16-17，邦訳8-9頁）。

またドイツのJ.ヒルシュらが唱えた前述の「国家導出論」においては国家の形態と機能は資本蓄積の諸原理から論理的に＜導出＞されるべきであるとして政治と経済との統合的理解が主張されているが[9]，プーランザスはこうした理解によっては国家形態の種別性や偶有性を説明できないと批判する。政治的なるものと経済的なるものの場と対象は様々な生産諸様式に応じて変化するのであり，後述のようにそうした変化を特徴づけるものはそれぞれの場の物質的な構成なのである。それゆえ「資本の蓄積・再生産において国家が現在担っている役割は，まさに国家および経済のそれぞれの空間の変化それ自体のうちに組み込まれている」（Poulantzas, 1978, p.，邦訳189頁）と考えられるのである。

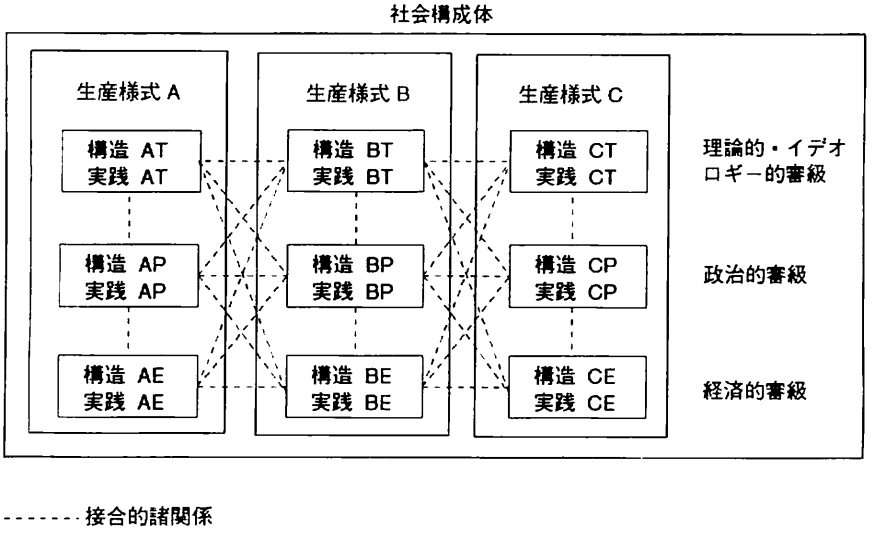


図2 プーランザスの社会構成体（上野, 1991, p.232より作成）

このように国家に関する経済主義的アプローチに対して，プーランザスは国家の一般理論の不可能性を主張する。上述のように経済の場と国家の場は歴史・地理的な種別性を有しており様々な生産諸様式を通じて普遍の理論的対象を持つ経済や政治についての一般理論はありえないと考えられる。経済や政治およびイデオロギーといった諸審級の境界を定め，それらの場を描き出し，そしてそれらの諸規定全体の統一性を構成するものは，それら諸審級間相互の連関と接合 articulation の様式なのである（Poulantzas, 1978, pp.18-19，邦訳 9-10 頁）。

このようにプーランザスは資本主義的社会構成体の接合的な構造に焦点をあてる。図2はプーランザスの社会構成体概念を表したものであるが，彼はここで「社会構成体」と「生産様式」とを厳密に区別している。「社会構成体」の概念によって示されるものは，一つの生産様式が他の生産様式に対して支配的地位を占めるような複雑な統一体である。一方「生産様式」の概念によって示されるものは，諸審級ないし諸水準としてあらわれるような諸構造と諸実践の特定の結合の様式である（Poulantzas, 1968, pp.10-12，邦訳 6-8 頁）。これは生産力と生産諸関係の結合様式を表す一般的な生産様式概念とは異なり，政治的審級やイデオロギー的審級などの上部構造をも含んだものである。

このようなプーランザスの社会構成体概念は，彼自身が言うように，抽象的に再生産される生産諸様式が空間化された単なる積み重ね=具体化とみなしてはならない。それはより関係的でダイナミックなものなのであり，諸審級を構成する諸構造と諸実践は生産諸様式の内で/間で弁証法的に相互作用しあうものと考えられる。ポリティクスの概念に関するプーランザスの有名な定式において，彼はル・ポリティク le politique—国家という法的・政治的上部構造—とラ・ポリティク la politique—階級の政治的諸実践—との区別を強調している。こうした区別に従えば，一つの構造的審級はそれ自体としては直接的に一つの実践を構成するわけではない。「政治的実践がかかわる対象は様々な社会的諸水準に依存している…。政治的実践は同時に経済的なものにもイデオロギー的なものにも理論的なものにも，そして厳密な意味での政治的なもの<le politique>にもかかわるのである」(Poulantzas, 1968, p.40，邦訳 43 頁，傍点原著者）。こうした区別を導入することで，プーランザスは諸構造と諸実践の間の矛盾と接合を明らかにし，階級の政治的諸実践，すなわち階級闘争への理論的可能性を探ろうとしたと考えられる。

図2が示すように，各々の構造および実践は潜在的には二重の接合様式において相互に関係している。一つは異なる諸審級の間の垂直的接合であり，もう一つは異なる生産諸様式の間の水平的接合である。社会構

成体の種別性はこのような異なる諸審級および生産諸様式の間の二重の接合の様式によって重層的に決定されている[10]と言えよう。

このようなプーランザスの社会構成体概念に対して，上野（1991）はそれが社会一般についてのものではなく，一つの支配的生産様式から別の生産様式への移行過程にある社会についてのものであること，それゆえプーランザスの社会構成体概念は独占資本主義段階にある現代社会にはあてはまらないと述べている。しかしながら上野の批判は，彼の意図とは反対に，国家の一般理論の不可能性と重層的決定の歴史的種別性（≠歴史主義）を示唆している。さらに現代資本主義がますますグローバル化し第三世界地域を周辺部資本主義のもとへと包摂している状況においては，異なる生産諸様式の間の接合は世界資本主義においてますます重要な局面を形成しつつあると言えよう。

ラクラウとムフによるプーランザスへの批判は，より根本的かつラディカルなものである。「一般に『国家の相対的自律性』を説明しようとする試みは，縫合された社会 sutured society という前提—例えば経済による最終審級における決定を通じた—を受け入れた枠組の中で行われている。…国家をめぐる近年のマルクス主義者たちの議論—とりわけプーランザスの仕事—のほとんどをだめにしているのは，まさしくこの前提をそれとは両立し得ない自律性概念と結びつけようとする希望なのである」（Laclau and Mouffe, 1985, pp.139-140，邦訳 221-222 頁）。プーランザスは社会構成体の多様性と複雑性を認めているが，そこでは確かに社会の統一性を前提としており，また「最終審級における経済の決定」の概念も決して放棄してはいない（Jessop, 1985）。その意味でラクラウとムフによる批判は的を得ているといえよう。しかしながらプーランザス自身も「経済の決定」の限界には気づいていたように思われる。「経済による全構造の最終審級における決定は，経済がそこでつねに支配的役割を保持するということを意味しない」，言い換えれば「経済は，それが諸審級の中心移動 decentration に基づく支配の移動 deplacement を規制する限りにおいてのみ，支配的なのである」（Poulantzas, 1968, pp.10-11，邦訳 7 頁）。つまり経済はそれ自体として社会構成体における支配的役割を果たすのではなく，例えば封建的生産様式における宗教的・イデオロギー的審級の果たす支配的役割が経済的なものの作用によって規定されているという限りにおいて，「支配的」とされるのである。しかしこのような説明の仕方はラクラウとムフが批判するように，あらかじめ支配と決定の範囲が限られている「縫合された社会」を前提としており，彼自身が提唱する「接合」の概念とも矛盾すると思われる。その点においてプーランザスの社会構成体概念は経済決定論の残滓を払拭することと史的唯物論の枠組を放棄することの間で微妙に揺れ動いているように思われる。

本稿では「最終審級における決定」という問題設定に示されるような社会の原因を探る試みを放棄することを提唱したい。社会それ自体には必然的な因果関係はありえず，代わりに偶有的な接合関係があるだけである。これこそがネオ・マルクス主義の政治理論から継承すべきことであると思われる。アルチュセールが示した重層的決定の概念は，その厳密な意味において，社会の存在に関する因果的説明を拒否するものである。Jessop（1990）が指摘するように，われわれは理論的な決定不可能性と現実世界における確定性との双方を同時に含意する社会現象の「偶有的必然性 contingent necessities」を認める必要がある。それゆえわれわれは問題設定を「どの審級ないし水準が社会において決定的であるのか」というものから「異なる因果関係はいかにして接合し，実際の諸事象を必然的なものとするのか」というものへと変えるべきであろう。

2. 国家の制度的物質性

前述のように社会構成体と生産様式の種別性は，異なる諸審級・諸水準の間の接合によって重層的に決定されていると考えられる。プーランザスはそうした接合の物質的形態を生産様式の「母胎 matrices」と呼ぶ。「母胎」はそれを通して異なる諸審級・諸水準が相互に接合し合う場なのである。『国家・権力・社会主義』においてプーランザスは資本制生産様式の「母胎」の様相を明らかにすることを試みている。彼は直接生産者からの生産手段および労働対象の剥奪（=脱領有化 dépossession）によって労働過程に刻印された一定の物質的構造を「空間的・時間的母胎 matrices spatiales et temporelles」と呼び，それを資本制生産様式の物質的枠組と位置づけている。

プーランザスはこうした「母胎」の事例を二つほど説明している。一つはいわゆるテイラー主義のもとで工場の生産ラインに物質化された空間-時間的枠組で

ある（Poulantzas, 1978, pp.70-71，邦訳 65-66 頁）。この空間的・時間的母胎は連続的・等質的であると同時に，分割され細分化された細胞状をなしている。そこでは作業空間が細分化されかつ固定されているため労働者もまた作業過程によって細分化された各々の場所に分割配置されており，また作業時間も客観化され科学的に管理されているため労働者は標準時間割に基づく作業過程に拘束されている。このようなテイラー主義の空間-時間的枠組のもとでは，「個人は社会的分業における一連の諸実践が人間の身体そのもののうちに物質的に結晶し，集束する点としてたち現れている」（Poulantzas, 1978, p.71，邦訳 66 頁）のである。

さらにこうした個人化は二重の意味における分業を導くと考えられる。一つは作業手順に従った労働過程の細分化を意味する水平的分業であり，もう一つは知的労働と肉体労働との分離を意味する垂直的分業である。後者の垂直的分業において，知的労働は空間的・時間的に肉体労働の現場からは区別され，生産管理部門や技術部門に集約される。こうした垂直的分業は生産の知的イニシアティブを労働者から管理・技術部門へと移転することによって，ミシェル・フーコーがいうところの「知-権力」を独占するエンジニア層およびテクノクラート層の台頭を促すこととなるのである。

このように空間的・時間的母胎を通じた分業の進展は，権力の正統性自体が科学的知によって制度化されるという知と権力の間の特定の結びつきを生みだすこととなる。さらにまた空間的・時間的母胎の編成に関する言説自体がエンジニア層・テクノクラート層などの社会階層によって独占的に管理されることで，空間的・時間的母胎の生産を通じた社会的分業の再生産が保証されるのである[11]。もちろんこうしたことは一工場の内部にとどまるものではない。空間的・時間的母胎の生産は総体としての社会的分業を同様に導いているのである。そこでの国家はその諸装置総体において肉体労働から切り離された知的労働を具現化したものであると考えられる。資本主義国家は知や言説の作動およびそれらに対する統御を通じて，国家諸装置とその担い手による知・言説の恒常的な独占と，それからの人民大衆の永続的排除を可能としているのである[12]。

プーランザスが挙げたもう一つの例は，国民国家の空間的母胎としての「領土 territory」である（Poulantzas, 1978, pp.110-118，邦訳 107-117 頁）[13]。前述のように様々な生産諸様式に応じて異なる空間的母胎が存在し，資本主義の空間的母胎のもとでの都市や国境・領土は先資本主義のものとは異なる現実と意味を有している。資本制生産様式のもとで直接生産者は土地から解き放たれはするが，結果は工場や近代家族，学校，軍隊，監獄，都市そして国家領土といった枠組の中に分割配置されるに過ぎない。すなわち近代国家は人民大衆の国家諸装置への囲い込みを通じて諸個人を国民国家の「諸主体」へと変換すると同時に，人民=国民という諸個人の統一性を実現するのである。

プーランザスはこのような「主体化=国民化」の逆説的な事例として強制収容所と民族絶滅の例をあげている。強制収容所は国家領土の内部において非-国民（あるいは反-国民）を閉じこめる空間であり，それは「内部」における「外部」の創出を通じた境界の内在化である（Poulantzas, 1978, p.116，邦訳 114 頁）。さらに民族絶滅とは，国境内部で「外部」（異邦人集団）に対する国家的空間を閉鎖し囲い込むことで，差異を消滅させ等質化する種別的な皆殺しの形態であるという点で，国民国家に固有の空間化と連動した近代的発明品なのである（Poulantzas, 1978, p.118，邦訳 116 頁）。

国民国家の空間的母胎としての国家領土に関するプーランザスの分析はきわめて困難な問題を提議している。それは労働者階級と近代民族との関係という既存のマルクス主義によっては軽視されてきた問題である。民族問題に直面した第三インターナショナルや「正統派マルクス主義」の政治的立場は，民族自決権はそれが「国際プロレタリアート」の利害に一致する限りにおいて認められるべきであるというものであった。プーランザスはこのような民族的物質性の無視に起因する民族の道具主義的理解を厳しく批判している（Poulantzas, 1978, pp.127-133，邦訳 126-132 頁）。近代民族はブルジョアジーの創造物でもなければ労働者階級の単なる付属品でもない。それは近代社会階級の間の力関係の産物なのである。労働者階級の空間性と歴史性は近代国民国家の空間的・時間的母胎の中で把握されるのであり，またそれ自身，労働者階級とブルジョアジーとの力関係の結果として民族の構成要素を形成しているのである[14]。

3.「経済的唯物論」から「地理的唯物論」へ

以上述べてきたように，プーランザスは空間的・時

間的母胎に物質化された生産諸関係と社会的分業の種別性という観点から資本主義国家の組織原理を把握しようとした。「資本主義国家は社会的な時間・空間を専有するという点で，また空間および時間を組織化する諸方法を独占する傾向を有することによってこれらの母胎の配置に介入するという点で，種別性を有しているのである」（Poulantzas, 1978, p.109，邦訳 107 頁）。このような彼の試みは，あえて言うならば，唯物論的な資本主義国家論へ空間性（および時間性）の概念を導入しようとする試みであると言えよう。

プーランザスの空間性概念については，わずかの論者がコメントしている。例えばジェソップは近代民族と資本主義国家との結合の具体的形態として空間-時間の組織化の諸様式についてのプーランザスの説明に言及している（Jessop, 1985）。地理学の側からはクック（Cooke, 1989）とソジャ（Soja, 1989）がプーランザスの空間性概念について言及している。クックはプーランザスの議論をとりあげながら民族と近代性との関係における空間的・時間的母胎の重要性を主張している。しかしながらクックの関心は主として資本主義国家ではなく民族に集中しており，それゆえプーランザスの空間論も階級や消費，生産あるいは国家それ自体についてよりも，民族およびナショナリズムについての議論としてこそふさわしいと述べている（Cooke, 1989, p.271）。

一方，ソジャはプーランザスの空間的・時間的母胎の概念を自らが言うところの空間性の概念と同質のものとしてとりあげ，「彼もまたある種の社会-空間弁証法を発見したのだ」（Soja, 1989, p.118）と位置づける。ソジャは何よりも空間的・時間的母胎と資本制生産様式との弁証法的関係に焦点を当てる。両者の関係は，まず最初に生産諸関係があり，次いでそれが空間的・時間的母胎を生み出すといった機械的因果論によって説明されるものではない。生産諸関係と社会的分業のうちに具現化されたこの空間的・時間的母胎は，同時に生産諸関係と社会的分業の諸前提として立ち現れ，資本制生産様式の物質的枠組を形成するのである。

それではわれわれはプーランザスの仕事から何をひきだせばよいのであろうか。わたしはプーランザスの仕事を手がかりとしてさらに展開されるべき課題の一つとして唯物論の地理学的再構成という問題を提示してみたい。それは空間物神論にも経済還元主義にも陥ることなく，不可欠の理論的契機として空間性の概念を唯物論に組み込むことである。もう一度，前掲の図２に戻ってみよう。すでに見たように社会構成体においては異なる生産諸様式が存在し，そこでは諸審級・諸水準が相互に接合的関係にある。それではこの図において空間性が占める位置はどこであろうか。それは特定の「空間的審級」なるものを構成するのだろうか。それとも異なる諸審級を結びつけるネットワークを構成するのだろうか。あるいはその上に社会構成体の総体が構築される地理的基盤のようなものが存在するのだろうか。

社会構成体にとっての空間性は，図２における線や文字として，語の厳密な意味において「物質化」されていると考えられる。生産諸様式と社会構成体の種別性が物質的母胎に具現化された接合の諸形態によって重層的に決定される様式は，図の意味が線や文字の形態に物質化された記号や語の種別的な関係として表される様式としてアナロジカルに対比される。換言すれば図の空間性は，線（---，—）や文字（「AT」，「構造」など）の種別的形態に物質化されているのである。さらにそうした種別的な形態はペンや定規，あるいはタイプライターやワードプロセッサーなど様々な物質的諸装置によって書かれまた描かれている。それゆえ図の「意味」が異なるということは，図に表されている「概念」が異なるのと同時に，様々な諸装置を用いて図に描かれた線や文字の形態が異なるということである。いかに「概念」が異なっていても描かれた線や文字の形態が同じであれば表される「意味」は少しも変わらない。「意味」は形態の物質性によって重層的に決定されているのである。もちろんこのことは線や文字の形態が「それ自体」として図の「意味」を決定することを意味しない。F.ソシュールがかつて述べたように語の意味はその語が置かれた多様なコンテクストに依存するのである。社会構成体における空間性の位置も，このような形態の物質性と同様なものとして理解することができると考えられる[15]。

社会構成体における資本主義の意味と価値は，様々な国家諸装置からなる資本主義国家の空間性に依存している。そうした空間性のうえに資本主義の知-権力は物質化されており，またそれを通して生産諸関係と社会的分業は再生産されている。プーランザスが明らかにしたように，国家諸装置の物質性を「経済的なるもの」に必然的・因果的に関連づけることは不可能である。そこでは経済からは相対的に区別される「物質性」

の種別的理論を構築する必要があると思われる。可能ならばわたしはそれを「経済的唯物論」と区別して「地理的唯物論」と呼びたい。

アルチュセールはその最後のテクスト（Althusser, 1994）[16]において，「偶然の唯物論 matérialisme aléatoire」という概念を展開している。「偶然の唯物論」とは必然性と目的論の唯物論に対立するもので，体系的に構成されてはならず，また体系に転換する必要もない哲学だとされる（Althusser, 1994, p.35，邦訳34頁）。さらにこの「偶然の唯物論」はすべてのものに対する物質性の優位を主張する—この場合の物質性とは実験装置の物質性であり，あるいは単なる痕跡であり，また痕跡を残す身ぶりの物質性とされる—（ Althusser, 1994, p.43, 邦訳47頁）。本稿で言う「地理的唯物論」とは基本的にアルチュセールが唱える「偶然の唯物論」と同質のものであると思われる。アルチュセールも指摘するように，経済的下部構造の優位性が最終審級において決定因となるのではなく，あらゆるものがその物質性—それは空間的・時間的母胎に具体化されている—に依拠している限りにおいて最終審級では決定因となりうるのである。しかしながらたとえ空間的・時間的母胎の物質性があらゆるものに対する優位性を保持しているとしても，それは物質性そのものが社会構成体において決定因となることを意味するものではない。空間的・時間的母胎の物質性は諸審級や諸水準の間の偶有的な接合を可能とするのであり，その結果，特定の審級や生産様式が他の審級や生産様式に対するヘゲモニーを獲得するのである。そこでは，経済的下部構造が上部構造を決定する，という意味における必然的な関係は存在しない。むしろそこでの関係性は，「複数の偶然的なものの出会いが必然になることだ」（Althusser, 1994, p.42，邦訳45頁），という意味において必然的であると考えられる[17]。

おわりに

本稿でわたしは「地理的唯物論」の構築という理論的課題を提示した。しかしながら空間性とポリティクスとの接合という問題設定には，もう一つの課題が含まれている。それは実践的課題としてのポリティクスの構築というものである。

ここで再びプーランザスの仕事に立ち返ってみよう。プーランザスは国家権力の諸技術としての規格化=個人化というフーコーの理論に依拠しながらも，一方でフーコーの権力概念を批判している。すなわちフーコー的な権力概念においては権力が禁止と象徴的抑圧ないし内面化された抑圧とに還元されてしまい，権力の行使に際しての組織された物理的暴力の役割が無視されてしまっている（Poulantzas, 1978, p.86，邦訳82頁）というものである。フーコーとは反対にプーランザスは権力を組織された物理的暴力に基づくものとして理解する。「国家によって独占された物理的暴力は，常に権力の諸技術と同意のメカニズムとの基礎を構成しており，またイデオロギー的な規律機構の網の目に刻み込まれており，暴力が直接に行使されないときでさえ支配が行き渡っている社会対の物質性を形作っているのである」（ Poulantzas, 1978,p.88，邦訳85頁）。そしてフーコーはこのような国家権力の物理的暴力と物質性を理解できないために，いかにして権力は「闘争」の存在を許容するのか，そして「抵抗」の基盤は何であるのか，ということを説明できないとプーランザスは言う（ Poulantzas, 1978,p.87，邦訳83頁）。闘争と抵抗は，まさに権力がそれによって実践的有効性を獲得するところの領有と支配の物質的構造の中に根ざしているのである[18]。

わたしが空間性のポリティクスについて語りうるのは，まさにこうした問題設定においてである。空間性に関するラクラウの主張（Laclau, 1990）とは反対に，わたしは空間性をきわめてダイナミックで開かれた，それゆえ競合的なものととらえる。マッシーが証明しようとしたように，空間性は秩序の要素とカオスの要素の双方を有しており，権力にとっては両義的存在なのである。一方で空間性は国家のイデオロギー装置と抑圧装置を構成し，それを通して生産諸関係と社会的分業がみずからを再生産する。しかしながら他方で，空間性は闘争と抵抗の場所をも構成する。言い換えれば，ある場合には空間性はベンサムの「一望監視装置 panopticon」—そこでは囚人が不可視の権力に従う諸主体として同定される（フーコー，1977）—のような物質的装置として現れる。しかしながら別の場合には，空間性は日常生活の空間的諸実践によって異なる意味とアイデンティティが創造される場所として現れる（ド・セルトー，1987）。その意味において，空間性はラクラウとムフが言うところの「結節点 nodal points」（Laclau and Mouffe, 1985）—そこでは意味が決して完全には固定されず，部分的にしか固定され

ない—として現れ，常に別の接合への余地を残しているのである。

上で述べたように，権力の基礎には国家装置の諸形態に物質化された物理的暴力に対する闘争が常に存在する。空間性は常にそうした闘争への潜在的可能性となってきたのである。ソジャが指摘するように，「資本主義のもとでの権力に満ちた空間の社会的生産は，抵抗も制約もなしに社会構造が景観へと刻印されるようなスムースで自動調節的な過程ではなかった」(Soja, 1989, p.128）のである。本稿は政治地理学と政治理論における空間性の概念の検討を通じて唯物論にとっての空間性の可能性と限界を明らかにすることを試みてきたが，空間性をめぐる闘争と抵抗の潜在的可能性については十分に明らかにすることはできなかった。そうした課題は近年とりわけアイデンティティとポリティクスをめぐる地理学研究において盛んに議論されてきており[19]，それらはもはや冒頭で述べたドライバーやマッシィの問題提議を越えてはるかに進展してきている。日本においてもそうした研究が紹介され，また実践的課題として．著手されることが望まれる。

本稿は，Nakashima, K. (1996) : Political geography and materialism : towards an articulation of politics and spatiality. In Nozawa, H. ed. : *Social theory and geographical Thought-Japanese contributions to the history of geographical thought (6)*, Kyushu University, Fukuoka, pp.29-41.に加筆修正を施したものである．

なお内容は 1993 年度人文地理学会において発表したものを下敷きとしている。また本稿の一部を発表した文部省科学研究費総合研究（A）「社会理論と地理学—その思想史的考察—」（課題番号 05301091、研究代表者　野澤秀樹）および日本地理学会「空間と社会」研究グループの各研究集会では、参加者の方々から有益な御意見・御教示をいただいた。記して謝意を表します。

注

1）こうした傾向は大会報告要旨集と比べて翌年の「経済地理学年報」に掲載された大会報告論文において一層顕著なものとなっているように思われる。

2）その中でも（都市）社会学は地理学との共通論題に関する主題的検討を積極的に実践しているように思われた。

3）そうした点についてはすでに，高木（1991）や千葉（1988）および竹内（1987）などのすぐれた論考があるのでそちらを参照されたい。

4）テイラーによれば社会学や人文地理学はもっぱら都市やローカルなスケールを強調することで経験的バイアスをもった社会科学分野として成長し，経済学や政治学はマクロおよび国家のスケールを重要視することで世界経済においてより多くイデオロギー的役割を持ってきたとされる（Taylor, 1981a）。

5）後の著作（Taylor, 1985）においてテイラーは「地方国家」が中央政府の政策を遂行するための国家装置の一部に過ぎないだけでなく，中央政府に対する地方の抵抗の道具ともなりうることを指摘して，そうした両義的性格を地方国家の特質と位置づけている。

6）ただし『世界システムの政治地理』（Taylor, 1993, p.43，邦訳上巻 50 頁）においてはウォーラーステインの空間構造を「水平的な三層の地理的構造」と呼び，自らのそれを「垂直的な三層の地理的構造」と呼び変えている。

7）ローカル・スケールとグローバル・スケールの関係という点については，Jonas（1994）がテイラーの地理的スケールの三層構造を有効な 'ordering framework' の理論として評価しながらも，そうした理論ではローカリティの政治学や国家の政策決定がはらむ地政学的な動態性や複雑さを説明できないとして，世界システム論に基づく政治地理学の可能性と限界を指摘している。また類似の指摘は Shaw（1986）によって周辺部資本主義国家の位置づけをめぐってなされている。

8）邦訳の著者名は「プーランツァス」であるが，同訳書第二刷（1989 年）の「訳者あとがき」における訳者の田中正人氏による訂正や，『プーランザスを読む』（ジェソップ，1987）の「訳者あとがき」における訳者田口富久治氏の指摘に従い，本稿では「プーランザス」と表記する。

9）Taylor（1982）や Johnston（1984）は基本的にこのような「国家導出論」の立場を指示している。

10）「重層的決定 surdetermination」の概念はアルチュセールによって呈示されたもので，一つの審級（例えば経済的審級）による単純な因果的決定ではなく，相異なるいくつかの諸審級の特定の組み合わせ（構造的関係）の結果もたらされるある一つの決定を意味している（Althusser, 1965）。

11）近代的な工場システムの導入にともなう時間-空間の規律化という問題に関しては，桜井（1984）が F.W.テイラーの科学的管理法のもとで情報と権限の集中化にともない工場空間の均質化が進められたことを指摘している。また Stein（1995）は 19 世紀カナダの織物工場における労働者に対する時間と空間の規律化が工場の作業規律を強化したことを指摘している。

12）その意味でプーランザスの指摘は，国家と人民大衆との種別的分離を前提とした現今の代議制民主主義に対するラディカルな批判となりうるであろう。

13）プーランザスは近代民族の時間的母胎としての「伝統」についても同様に分析を加えているが（Poulantzas, 1978, pp.118-127、邦訳 117-126 頁），紙幅の関係上ここではそ

の紹介を省略する。ただしそこで彼が加えた注釈については強調しておこう。「ここで問題となるのは資本主義的な時間の物質的母胎であって，その表象ではない」(p.122，邦訳 120 頁)。つまり彼がここで問題としていることは，空間的母胎についての分析と同様に，時間概念や歴史理論など時間それ自体についての「表象」ではなく，資本主義的な時間と資本主義国家に固有の制度的骨格および様々な国家諸装置との関係なのである。

14) この問題はプーランザスの以下の説明によって端的に示されている。「ブルジョア・ナショナリズムは，もしそれが労働者階級の構成およびその闘争の物質性にその基礎を置いていなかったならば，またもしそれが民族的イデオロギーのまさに労働者的側面と接合していなかったならば，労働者階級を民族的=帝国主義的戦争における殺戮へと追いやるほどの影響力を及ぼし得なかったであろう。」(Poulantzas, 1978, p.132，邦訳 132 頁)

15) ここで誤解のないように大急ぎで注釈を加えなければならないが，わたしは図2が社会構成体の「現実」を表していると言っているのではない。この図で表されているものは社会構成体についての「概念」の表象である。それゆえ図2における空間性の位置については原理的に「アナロジカル」にしか語ることはできないのである。

16) 同書はアルチュセールの死後に出版されたもので，主に 1984 年から 1987 年にかけての彼の思索の軌跡を著したものである。

17) こうした関係性のあり方は，ジェソップが言うところの「偶有的必然性」と同じものであると考えられる。

18) プーランザスは階級闘争を社会諸関係における抵抗の基礎とみなしているが，抵抗の基礎は生産諸関係（すなわち階級関係）に限られるものではなく，ジェンダーや民族，人種など経済的諸関係からは相対的に区別される他の社会諸関係においても見いだされると考えられる。

19) 1995 年の Society and Space 誌上で C.ムフを迎えてラディカル・デモクラシーと空間理論との理論的交流がはかられたが，それはこうした試みの一つと言えるだろう。詳しくは別稿（Nakashima, 1996）を参照されたい。

文 献

上野俊樹（1991）：『アルチュセールとプーランツァス』新日本出版社，307p.

カステル，M. 著，山田 操訳（1984）：『都市問題—科学的理論と分析—』恒星社厚生閣，463p. Castells, M. (1977): *La question urbaine*. Maspero, Paris, 529p.

カステル，M. 著，石川淳志監訳（1989）：『都市・階級・権力』法政大学出版局，280p. Castells, M. (1978) : *City, class and power*. translation supervised by Elizabeth Lebas, Macmillan, London, 198p.

桜井哲夫（1984）：『「近代」の意味—制度としての学校・工場—』日本放送出版協会，218p.

高木彰彦（1991）：世界システム論と政治地理学の新たな展開．地理学評論，64，839-858.

竹内啓一（1987）：ゲオポリティクの復活と政治地理学の新しい展開—ゲオポリティク再々考—．一橋論叢，96，523-546.

千葉立也（1988）：政治地理学の活性化へ向けて．地理，33（10），26-32.

ド・セルトー，M. 著，山田登世子訳（1987）：『日常的実践のポイエティーク』国文社，4254p. de Certeau, M. (1990) : *L'invention du quotidien 1: arts de feire*. Gallimard, Paris, 350p.

フーコー，M. 著，田村 俶訳（1977）：『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社，318p. Foucault, M. (1975): *Surveiller et punir : naissance de la prison*. Gallimard, Paris, 318p.

Althusser, L. (1970) : Idéogie et appareils idéologiques d'etat : note pour une recherche. *Pensée*, juin, 3-38. アルチュセール，L. 著，西川長夫訳（1975）：『国家とイデオロギー』福村出版，192p.

Althusser, L, (1994) : *Sur la philosophie*. Gallimard, Paris, 178p. アルチュセール，L. 著，今村 仁訳（1995）：『哲学について』筑摩書房，234p.

Cooke, P. (1989) : Nation, space, modernity. in Peet, R. and Thrift, N.eds.: *New models in geography : the political-economy perspective*. Unwin Hyman, London, 267-291.

Driver, F. (1991) : Political geography and the state formation : disputed territory. *Progress in Human Geography*, 15 (3) , 268-280.

Harvey, D. (1977) : Labor, capital and class struggle around the built environment in advanced capitalist societies. *Politics and Society*, 6, 265-295.

Harvey, D. (1978) : The urban process under capitalism : a framework for analysis. *International Journal of Urban and Regional Research*, 2, 101-131.

Harvey, D. (1985) : *The urbanization of capital : studies in the history and theory of capitalist urbanization*. The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 239p. ハーヴェイ，D. 著，水岡不二雄監 訳（1991）：『都市の資本論—都市空間形成の歴史と理論—』青木書店，328p.

Holloway, J. and Picciotto ,S. eds. (1978) : *State and capital : a Marxist debate*. Edward Arnold, London. 220p.

Jessop, B. (1982) : *The capitalist state : Marxist theories and methods*. Martin Robertson, Oxford, 296p. ジェソップ，B. 著，田口富久治・中谷義和・加藤哲郎・小林耕二訳（1983）：『資本主義国家—マルクス主義的諸理論と諸方法—』御茶の水書房，362p.

Poulantzas, N. (1968) : *Pouvoir politique et classes sociales de l'Etat capitaliste*. Maspero, Paris, 392 p. プーランツァス，N. 著，田口富久治・山岸紘一訳（1978）：『資本

主義国家の構造—政治権力と社会階級—』未来社，242p.

Jessop, B. (1985) : *Nicos Poulantzas : Marxist theory and political strategy*. St. Martin's Press, New York, 391p. ジェソップ，B. 著，田口富久治監訳（1987）：『プーランザスを読む—マルクス主義理論と政治戦略—』合同出版，461p.

Jessop, B. (1990) : *State theory : putting the capitalist state in its place*. The Pennsylvania State University Press, Pennsylvania, 413p. ジェソップ，B. 著，中谷義和訳（1994）：『国家理論—資本主義国家を中心に—』御茶の水書房，606p.

Johnston, R. J. (1984) : Marxist political economy : the state and political geography. *Progress in Human Geography*, 8, 473-492.

Jonas, A. E. G. (1994) : The scale politics of spatiality. *Environment and Planning D: Society and Space*, 12, 257-264.

Laclau, E. (1990) : *New reflections on the revolution of our time*.Verso, London and New York, 263p.

Laclau, E. and Mouffe, C. (1985) : *Hegemony and socialist strategy : towards a radical democratic politics*. Verso, London and New York, 197p. ラクラウ，E.・ムフ，C. 著，山崎カヲル・石澤　武訳（1992）：『ポスト・マルクス主義と政治—根源的民主主義のために—』大村書店，315p.

Massey, D. (1992) : Politics and space / time. *New Left Review*, 196, 65-84.

Nakashima, K. (1996) : Political geography and materialism : towards an articulation of politics and spatiality. in Nozawa, H. ed. : *Social theory and geographical Thought -Japanese contributions to the history of geographical thought (6)*, Kyushu University, Fukuoka pp.29-41.

Poulantzas, N. (1978) : *L'Etat, le pouvoir, le socialisme*. Presses Universitaires de France, Paris, 300p. プーランツァス，N. 著，田中正人・柳内　隆訳（1984）：『国家・権力・社会主義』ユニテ，312p.

Shaw, A. (1986) : Commentary on "A politics of failure : the political geography of Ghanaian elections, 1954-1979". *Annals of the Association of American Geographers*, 76, 114-116.

Soja, E. (1989) : *Postmodern geographies: the reassertion of space in critical social theory*. Verso, London and New York, 266p.

Stein, J. (1995) : Time, space and social discipline: factory life in Cornwall. Ontario, 1867-1893. *Journal of Historical Geography*, 21, 278-299.

Taylor, P. J. (1981a) : Geographical scales within the world-economy approach. Review, 5, 3-11.

Taylor, P. J. (1981b) : Political geography and the world-economy. in Burnett, A. D. and Taylor, P. J. eds. : *Political studies from spatial perspectives : Anglo-American essays on political geography*. John Wiley, Chichester, 157-172.

Taylor, P. J. (1982) : A materialist framework for political geography. *Transactions of the Institute of British Geographers New Series*, 7, 15-34.

Taylor, P. J. (1983) : The question of theory in political gepgraphy. in Kilot, N. and Waterman, S. eds.: *Pluralism and political geography : people, territory and state*. Croom Helm, London, 9-18.

Taylor, P. J. (1985a) : *Political geography : world-economy, nation-state and locality*. Longman, London, 238p. テイラー，P. 著，高木彰彦訳（1991，1992）：『世界システムの政治地理—世界経済，国民　国家，地方—（上，下）』大明堂，422p.

Taylor, P. J. (1985b) : The value of geographical perspective. in Johnston, R. J. eds.: *The future of geography*. Methuen, London, 92-110.

Taylor, P. J. (1989a) : The error of developmentalism in human geography. in Gregory, D. and Walford, R. eds.: *Horizons in human geography*. Macmillan, London, 303-319

Taylor, P. J. (1989b): The world-systems project.in Johnston, R. J. and Taylor, P. J. eds.: *A world in crisis?*, Blackwell, Cambridge, 333-354.

Taylor, P. J. (1993) : *Political geography : world-economy, nation-state and locality. 3rd ed.* Longman, London, 360p.

Wallerstein, I. (1979): *The capitalist world-economy : essays*. Cambridge University Press, Cambridge, 305p.